［STEP　5］　～札を覚えよう（その4）～

《はやよか》

賢明な読者の皆さんは、もう、この「《　》」に囲まれた文字の意味を簡単に察することができるだろう。百枚の中に同音で始まる札が一枚ずつのものが「むすめふさほせ」、二枚ずつのものが「うつしもゆ」、三枚ずつのものが「いちひき」ときたら、この「はやよか」というのは当然百枚の中に同音で始まる札が四枚ずつある音（字）ということになる。では、いつものように札探しから始めよう。詠札百枚の中から「は」で始まる札を四枚、「や」で始まる札を四枚、「よ」で始まる札を四枚、「か」で始まる札を四枚、合計十六枚の札を取り出してほしい。見つかったであろうか。札が不良品でない限り見つかる筈である。見つかったら、その詠札に対応する取札を取札百枚の中からそれぞれ探し出してほしい。目の前には、詠札十六枚、取札十六枚の合計三十二枚が置かれたことと思う。ここで「嫌（イヤ）」になってしまったらおしまいである。一つ踏んばってほしい。順序よく整理してみよう。

まずは、「は」の札。詠札を四枚並べてみる。「はる」で始まる札が二枚と「はな」で始まる札が二枚ある。共通するのはそれぞれ二音（字）めまでで、三音（字）めは異なっている。ゆえにこの「は」札四枚は、全て三字決まりである。仮に「はな」が一枚最初に詠まれたならば、二字決まり一枚と三字決まり二枚というように「決まり」の状況が変わる。次に続けて、「はな」が詠まれれば残りは、「はる」の三字決まりが二枚のみとなり、残りの片方が出たら最後は「は」の一字決まりとなる。また、「はな」が一枚出たあとで「はる」が一枚出たら、残り二枚は「はな」「はる」の二字決まり二枚となる。このように詠まれる順番によって決まりが変化することを十分に頭に入れておいてほしい。同音で詠み始められる音がふえればふえるほど複雑になるように思えるが、基本的変化のパターンをここまででしっかりと理解しておけば、あとで枚数がふえても自分で考えられるようになる。是非、ここら（同音始まり四枚）くらいまで理解しておいてほしい。今後はあまり詳しく説明しないようにする予定であるから……。

さて、では、その「は」で始まる四枚の詠札に対応する取札を四枚並べて、決まり字をしっかり頭に入れよう。詠札を見ずに取札だけをみて、「これは、はるす」「これは、はるの」「これは、はなさ」「これは、はなの」と、どんな順番でもどんな向きからでも言

えるように覚えられればよい。覚えることができたら、次の音（字）に移ろう。

次は、「や」である。同様に詠札を見て「決まり」を探す。二字決まりが「やへ」「やす」の二枚で、三字決まりが「やまざ」「やまが」の二枚という内訳である。それに対応する取札を四枚並べて対応させながらしっかりと覚える。覚え込んだら、札が詠まれた順番でどのように決まりが変化するかを自分で考えてみよう。一通り考え終ったならば、次へ行こう。

次は「よ」である。詠札を四枚並べて「決まり」を探す。二字決まりが「よも」「よを」の二枚で、五字決まりが「よのなかは」と「よのなかよ」の二枚である。取札と対応させてみて、取札を見て決まり字がパッと頭に浮かぶようになったら、詠まれた順による決まりの変化を考えてみよう。考え終えたら次へ進もう。

最後は「か」である。「は」「や」「よ」と同様に覚えてほしい。確認事項や覚え方は今までと同じである。ここまで札を覚えてきたのだから、「か」の札についても一人で覚えられる筈である。念のため、「か」の札について紹介だけしておこう。二字決まりの札が「かく」と「かさ」の二枚、三字決まりの札が「かぜそ」と「かぜを」の二枚、計四枚となっている。

仕上げに取札を十六枚シャッフルして、出てきた順に決まり字を言ってみる。全部言えるようになったら、次のステップへ移ろう。

決まり字・下の句対照表

〈はやよか〉

「はなさ」……ふりゆくものはわかみなりけり
「はなの」……わかみよにふるなかめせしまに
「はるす」……ころもほすてふあまのかくやま
「はるの」……かひなくたたむなこそをしけれ
「やす」……かたふくまでのつきをみしかな
「やへ」……ひとこそみえねあきはきにけり
「やまが」……なかれもあへぬもみちなりけり
「やまざ」……ひとめもくさもかれぬとおもへは

「よも」……ねやのひまさへつれなかりけり
「よを」……よにあふさかのせきはゆるさし
「よのなかは」…あまのをふねのつなてかなしも
「よのなかよ」…やまのおくにもしかそなくなる
「かく」……さしもしらしなもゆるおもひを
「かさ」……しろきをみれはよそふけにける
「かぜそ」……みそきそなつのしるしなりける
「かぜを」……くたけてものをおもふころかな

札　音　（2）

～坊主めくり～

小倉百人一首の詠札を使用する簡単なゲームである。普通詠札には詠人の絵が描かれており、女性を「姫」、僧侶を「坊主」と呼ぶ。一般的な遊び方を紹介すると、まず、詠札百枚をよく切って、裏返しにして山に積む（山は一つでも複数でもよい）。競技者はその山札を取り囲むように輪になって座り、順番に札をめくって、自分の前に積んでいく。もしも、坊主をめくってしまったら自分の持ち札を場に出さなければならない。その場の札は、次に姫をめくった人がもらえることになっている。但し、場に札のないときに姫をめくった場合は、続けてもう一枚めくることができる。こうして、山札百枚をめくり終った時に一番持ち札の多い人が勝ちとなるゲームである。単純だがやってみるとなかなか面白い。是非一度は、やってみるとよいと思う。ただ、このゲームは地方や家庭によってルールがいろいろと違う。役札をたくさんつくった複雑なものもある。例えば、台付（皇族）の札をめくると場札がもらえ、姫札はもう一枚めくるだけ（台付の姫は両方できる）というルールや、弓矢を持った官人が出てくると左隣の人の持ち札を全部取ることができるといったルールである（他にも多種多様のルールがある）。ゲームの前にルールを取り決めておいて、今回は「〇〇ルール」次は「△△ルール」というようにルールを変えてやってみるのも楽しいのではないかと思う。坊主めくりをとおして小倉百人一首に親しみを持つようになった人も結構多いのではないだろうか。

札　音